

提出日： 2025 年 7 月 1 日

研究促進期間制度 研究実績報告書

所属学部・研究科	身分	氏名
経済学部	准教授	南 映子

研究期間	以下1～4より、取得した研究機関を選択し、該当番号を右欄にご記入ください。	
	1. 2024年4月 1日 ～ 2025年3月31日	1
	2. 2024年9月 1日 ～ 2025年8月31日	
	3. 2024年4月 1日 ～ 2024年9月20日	
	4. 2024年9月21日 ～ 2025年3月31日	
活動報告	研究期間中に実施した研究活動を具体的にご記入ください。 海外活動補助費を受給した方は、海外活動の内容が分かるようにご記入ください。	
	「ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)」の理念を参照し、「第二外国語」(第三言語)の学習・教授法の研究および教材の作成を目的に研究活動を行った。研究拠点としてエクス・マルセイユ大学(AMU, フランス)の LPL(言語および言語運用研究所)に所属し、LEdA(言語教育・習得に関する研究チーム)に加盟した。滞在中、夏期にはエジプト各地の大学から AMU を訪れたフランス語教員向けの研修を聴講し、またアリカンテ大学(Universidad de Alicante, スペイン)の語学教育センター(CSI)におけるスペイン語教員向け短期研修に参加した。秋には教材出版社 Difusión とネブリハ大学の共催する、外国語としてのスペイン語教育関連の催し(XII Jornadas Didácticas de ELE)や、ソルボンヌ・ヌーヴェル大学のフランス語教育に関する学会(DILTEC)大会にも参加し、示唆に富む講演や発表を聞く機会を得た。	
得られた研究成果について	上記の研究活動の結果、得られた研究成果についてご記入ください。	
	CEFR の発表からおよそ四半世紀を経て、外国語教育の目的が「言語知識の伝達」から「言語運用能力の育成」へと変化している現状を強く認識した。特にフランスにおける外国語としてのフランス語教育、スペインにおける外国語としてのスペイン語教育においては、この前提が広く共有されていることがわかった。授業の見学、研修受講、研究発表や講演の聴取、意見交換などを通じ、それ自体として意味のあるタスクを学習言語で実行しながら言語を習得する方法について、多くの示唆を得ることができた。また、母語や既習言語の知識も活用し、各人の「複言語能力」を養うという考え方についても、より深い理解が得られた。さらに、言語学習の社会的側面についても考察する機会があった。掲げられる理想と語られにくい現実、そしてその限界の中で何ができるかについて、多角的に考えるための貴重なヒントを得ることができた。	
今後の計画について	得られた成果を踏まえ、今後どのように研究を発展させる計画か、ご記入ください。	
	現在、日本で刊行された既存の教科書を用いながら、「言語運用能力」や「複言語能力」の育成を目標に、言語学習の社会的意義も視野に入れた授業運営のあり方を、授業を通じて模索している。今後は、様々な先行研究の知見、スペインやフランスで刊行された各言語の教材、そして日本における「外国語としての日本語教育」の動向を参考にし、さらにAIが急速に発達しつつある現代のニーズにも合わせた、主に日本語を母語とする大学生向けの教科書を作成したいと考えている。その際、学習者が高校卒業までに受けた英語教育の内容や方法についても理解を深めておくことが有用と思われる。	